演劇団S.O.

窓のある部屋

作　藤田ヒロシ

平日のありふれた午後、美咲から久しぶりに連絡があった。それも、短いメールだ。

「私、向こうへ行きます。もう会えないかもしれないけど、寂しくないからね。」絵文字もないシンプルなメールが、ハル、ミワ、マユの３人に送られてきた。

最初に動いたのはミワだ。そのメールを受け取るなり、他の２人に連絡をした。「何か知っている?」「向こうってどこ?」それに答えられる者は誰もいなかった。「私、今から美咲の部屋に行く」と、ミワは２人を誘いだすように、宣言した。そして、適当な嘘をついて、仕事を投げ出した。「友達の危機より重要な仕事なんて、存在しない」彼女は、そういう人間だ。だから、４人の中で誰よりも信頼されていた。いつも、「困ったら最後はミワに相談」それが、他の３人の合言葉。それを、ミワも自覚していた。だから、悔しかった。「相談」をないままに「結論」だけが美咲から送られてきたことに。そして、それが他の２人と同時に知らされたことに…。「せめて、最初に美咲の部屋に」それは、ミワにとってはプライドの問題になっていた。

美咲の部屋はすっかり片付いていた。そこにある種の「覚悟」が現れている。美咲は確かに「消えていた」直感的にそれはわかった。それでも、ミワはある種の「約束事」のように美咲の名を呼び、広くはない部屋をくまなく探した。

そして、直感が正しいことを証明すると、部屋の中央に立ち尽くした。携帯を取り出して、他の２人に「消えた」という事実を送ろうとしたとき、気がついた。それは、違和感とともに、そこに存在していた。小さなカーテン。それ自体は何の変哲もない。ただ、問題はその場所だ。角部屋でもないのに、側面の壁にある。ミワは「向こう」という美咲からのメールを思い出す。そして、そのカーテンをそっと開ける。

と、そこには「窓」…そう、確かに窓ではある。しかし、その向こうは壁。ミワは、丹念にその窓を調べる。開けては閉じ、閉じては開け。何度も繰り返す。壁を叩いて音を聞く。ただの窓と壁でしかない。

「私、向こうへ行きます。」美咲の最後の言葉。ミワは、確証はないけれども、信じ始めていた。「美咲は、この窓の向こうへ行ったんだ」と…。

ミワは、窓を再び何度も調べる。その動きは次第にエスカレートし、自らその向こうへ行こうと試みる。当然、壁にはじかれる。

ミワ

落ち着こう。冷静に、そう冷静に考えよう。整理しよう。そう、整理し

よう。美咲からのメール（と、携帯を出し）

「私、向こうへ行きます。もう会えないかもしれないけど、寂しくないからね。」

「向こうへ」（と、窓を指差す）壁だよ、壁。ただの壁。その向こう…隣の部屋…なわけないか。（再び、携帯）「もう会えないかもしれないけど」落ち着こう。冷静に、そう冷静に考えよう。整理しよう。そう、整理しよう。

と、黙り込みミワ。

そこへ、電話が鳴る。マイからだ。

ミワ　もしもし。うん、もう来ている。いない。部屋も片付いてる。わかった。あのね…ううん、来たら話す。うん、それじゃ。

電話を切るミワ。マイも近くまで来ているようだ。

ミワが今度は電話をかける。ハルへ。

ミワ　ハル？やっぱり美咲いないよ。部屋も片付いてる。いなくなった。「そう」って、それだけ？…マイがもうじき来る、今連絡あった。ハルは？…うん、わかった。うん。連絡する。

再び、沈黙のミワ。

やがて、独り語りだす。

ミワ　美咲。どこ行ったの？「向こう」って、どこよ？こんなメールじゃ分からないよ。あんた昔からそう。足りないのよ。情報が足りないの。「そこは？」「その前？」「その次は？」「それで、こっちは？」「それって、こう言うこと？」「それじゃ、こう言うこと？」って、こっちが一つ一つ確認作業しないと、全然見えないんだよ。全貌が見えないの。

だから、あんたと話し始めると長くなる。メールなんて最悪。全然わからない。で、結局電話してって…。

美咲。探してほしいの？ほしくないの？どっちなのよ。

私とハルとマイにメールして来て…私たち3人に連絡してきたら、探すよ。わかってるでしょ？「嫌だ」って書いてあっても、探すよ。

美咲。わかって、メールしてきたんでしょ？

昔さぁ「家出の勧め」って本を読んだことがあるんだ。別に、単純な興味本位よ。でね、その本によると、家出する時は「置手紙を手書きで書くこと」が大切なんだって。わかる？つまり、自分の意思で、自分は出ていくって事を明確にしておくことが大切って事。それでないと、家族やまわりは「事件に巻き込まれたんじゃないか」って大騒ぎになる。そうなると、「帰りたい」ってなった時に帰ってきづらくなるでしょ？

メールじゃさぁ、微妙だよね。美咲の携帯からって事だけで、あんたが打ったとは限らない。…そっか、だから私たち３人に送ったのか。３人に送ったなら「あんたが」って証明になるかものね。私たち４人の事知らないと、そうはしないもんね。そうね。そうだよね、あんたは自分の意思でいなくなったんだよね。

美咲。自分でいなくなったんだよね。

聞いていい？何があったの？仕事？恋愛？お金？何？いつもは話してくれたじゃない。確かにさぁ、不満ばかりだよ、いい事なんてそうそうないよ。上司はカッコつけるだけで、なんも知らないバカだし、雑務は増えるし、給料安いし、税金上がるし、出会いはないし、たまに出会えばこれまたバカでさ。

この前コンパにいた奴なんてずっと「IFRS/国際財務報告基準」の話を延々としてるだけだよ。「お前はそれしかないのかよ」って。何が悲しくて、男と女が週末の夜にワイン傾けながら「有形固定資産、無形固定資産の日本基準との相違点」とか話さないといけないわけ？「IFRS では、より細分化した資産管理が必要。例えば一台の飛行機を例にすると、従来の日本基準では「飛行機一台」で考えればいいけど IFRS では「エンジン」「機体」など細分化した形での資産価値を出す必要がある」って、どこで盛り上がるわけ？「すごぉい。細分化ぁ」とか言えばいいの？「流石は国際基準ね」とでも言えばいいわけ？で、その先に何があるわけ？大体、例えが「飛行機」って何？飛行機を資産で持ってる企業って・・・はいはい、国際化ね、グローバリゼーションね。

そんな話でお酒がおいしくなる？女子がときめく？男と女が恋に落ちるときに「グローバリゼーション」が必要なわけ？そういう話は、どこぞの商売女相手に話して、おだてられて、ボラれればいいんだ。ねぇ。

美咲。「向こう」って、いい男いるの？顔だけじゃない、本当のいい男、いる？

言ってほしかったな。…友達でしょ。でしょ？だよね？…そう、友達だよ。言ってほしかったな。せめて、決意するちょっと前にさ。話したところで、結果は変わらないかもしれないよ。こうやって「向こう」へ行っちゃったかもしれない。でもさ、見送れたでしょ。「元気でね」って、手を振って、笑って、泣いて、「じゃぁね」って…強がれたでしょ。「美咲はこれでいいんだ。幸せなんだ」って、納得できる材料を少しは揃えられたでしょ。そうだよ。私たちの為に話してほしかったんだよ。だって、このまま本当に会えなくなったら、わからないままだったら、ずっとずっとモヤモヤするでしょ。でも、今はそう思ってても、時間に追わる毎日に、そのモヤモヤも、美咲もことも、薄れていく。それ辛いでしょ。だって、友達なんだよ。「関係ない」なんてことは、ないんだからね。あんたの人生だからって、私たちに「関係ない」なんてことはないんだからね。…話してほしかったな。

美咲。「向こう」って、（窓を見て）どんな世界なの？

なんで、私も誘ってくれなかったの？

静寂。

マイが、少し早い足取りでやって来る。

マイ　ミワ。

ミワ　…マイ。

マイ　（少し戸惑って）どうかした？

ミワ　（首を振る）

マイ　ホントだ、空っぽになってる。ミワは何も知らないの？

ミワ　うん。

マイ　「困ったら最後はミワに相談」って、いつも言ってたのにね。

ミワ　役立たない「相談室」って、事だね。

マイ　そんなことはないって。

ミワ　…。

マイ　…美咲自身の意思、なんだよね、これ。

ミワ　そう思う。
マイ　だよね。
～間～
ミワ　あのさ、笑わないでよ。
マイ　ん？
ミワ　「向こう」ってメールにあったでしょ？これ、なんじゃって思うんだ。

窓を指差すミワ。

マイ　窓？…向こう側、壁じゃない。何これ？こんな窓…前来た時、あった？
ミワ　「あった」っていう記憶はない。けど「なかった」って言いきれる？
マイ　改めて聞かれると、自信ないけど…あれば気付くはずだよ。だって、可笑しいよこの窓。角部屋でもないのに、この場所にある。どう考えてもおかしいでしょ？気が付くよ。
ミワ　そうだよね。これは美咲が、最近付けたんだよね。
マイ　…。
ミワ　美咲が、何かの目的で付けたんだよね。
マイ　（噴き出して）…ちょっと、待って。それは、どうだろぉ？
ミワ　「笑わないでよ」って言ったでしょ。
マイ　美咲はこの窓を通って「向こう」へ行ったってこと？「向こう」へ行くためにこの窓を付けたの、美咲が？
ミワ　…。
マイ　窓のフレームつけただけで、何処かへ行ける？（と、窓の向こうを叩く）ほら、壁だよ。
ミワ　知ってる。
マイ　壁を通り抜けて…パラレルワールド？
ミワ　可笑しい？
マイ　可笑しい。おとぎ話じゃないんだから。

ミワ　「洋服着て、時計持ったウサギ」見たことない？

マイ　はい？あぁ、ないよぉ。…「ある」って言わないよね？

ミワ　ないよ。でも、だからって「いない」って断言できない。

マイ　そんなこと言ったら…でも、あれは本の中の話。

ミワ　本は全部「作り物」？全てが「空想」？

マイ　ミワ、本気？

ミワ　美咲は別の世界に行ったのよ。この窓の向こうへ。

マイ　穴でもタンスでもなく、窓ですか。でも、どうやって行くの？窓の向こうは、普通の壁。

と、窓を開いたり閉じたりし始めるマイ。

マイ　ところで、ハルは、来ないの？

ミワ　「外せない商談がある」んだって。

マイ　そう。大変ね、ハルも。愚痴しか言わないけど、なんだかんだで「仕事好き」なんだよね、ハルは。

ミワ　美咲がいなくなったのに、それより大切な仕事って何？

マイ　まぁまぁ、ハルはハルなりに気にかけてると思うよ。４人の中じゃ、一番クールなのは確かだけど、冷たいわけじゃない。「自分がいなくたって、結局会社はまわる」んだと思う。所詮は「歯車」だからね「交換パーツ」はある。むしろ、それ用意していない会社はまずいよね。でもさぁ、それはそれで寂しいことでもあるんじゃないかな。特にハルのようなタイプはさ。「私の責任」って、背負うの好きだから。

ミワ　…。

マイ　その点はミワとハルは似てると思うよ。

ミワ　私と？

マイ　そうよ。「私の責任」「頼られてる」って、その自覚が強い。そこから、逃げない。しっかり、背負う。意外と「そこまで期待してないですけど」って事もあるのにね。

ミワ　そうなの？

マイ　私も美咲も頼りにしてるよ。ハルだって、そう。あいつは私や美咲と違って「簡単に」相談しないけど、「するならミワ」って思ってるはずだよ。ミワは「答え」を出そうとしてくれるからね、そこを信頼してる。人によっては「愚痴を聞く」だけの人もいるじゃない？ハルにとってはそういうのいらないんだよね。「愚痴って終わる」程度のことなら、「自分で処理します」ってことなんだろうね。あいつが弱音吐くときは、本当のＳＯＳ。だから「聞き上手」じゃダメなの。時に同目線で、時に俯瞰で状況を見て、答え探しをしてくれる人…信頼してるよ。

ミワ　…。

マイ　多分だけど。

ミワ　…。

マイ　だから、ミワだってハルには話せるでしょ？私や美咲には言わないことを。

ミワ　…。

マイ　いいの、いいの。それが役割分担。タイプがちょっと違う４人だから、一緒にいられるんだから。みんな平等に、なんでも話して…なんて幻想、妄想。そんなこと求めたら、続くものの続かないよ。私の役割は…なんだろ？バランサー？そんなに器用じゃないか…。

ミワ　美咲の役割分担は？

マイ　そりゃ、決まってるでしょ。トラブルメーカー。

ミワ　確かに。

マイ　こうやって「問題」を起して、私たちを集める。美咲がいなかったら、疎遠になっていたかもね。大学卒業してもこうやって「いつもの４人」でいられるのは、きっと美咲のトラブルメーカーとしての能力が高いからだね。これは褒め言葉。でも、今回は笑って「またなの、美咲」ってわけにはいかないよね。いなくなっちゃたんだから。文句も言えないし、アドバイスもできない。笑えないし、怒れない。トラブルメーカーが自分で勝手に問題処理をしちゃいけない。バランス欠くでしょ、それじゃ。ねぇ。

ミワ　そうね。

マイ　そう。友達のくせに、勝手しやがって。

そこへ、メールの着信。２人同時に。

ミワ　メールだ。

マイ　私も。ハルから？

メールを確認して、二人言葉を飲む。そして、慌てて確認する。

マイ　美咲！

ミワ　「今から、私に会いに行ってきます。みんなにも会えたらいいな。」

マイ　何これ？意味わかんない。「私に会いに行く」って何？「みんなにも」って、ますます何？そうだ、返信。

ミワ　もう打ってる。

と、ミワ。読み終えた瞬間からメールを打っている。送信。

マイ　メール来るって事は、パラレルワールドじゃないね。

ミワ　どこにいるのよ、美咲。

と、ドアが開く。

マイ　美咲？

姿を見せたのは、ハル。

ハル　残念、私。

マイ　ハル。仕事じゃなかったの？

ハル　「何事も経験だから」って新人君に押しつけてきた。

マイ　大事な商談でしょ？

ハル　まぁ、そこそこ。

マイ　大丈夫？

ハル　だから、いいのよ。向こうもこっちも慎重だから、今日一日で何か決まるってことはない。それに、向こうの担当、私に気があるから、絶対次をセッティングする。新人君は新しい企画書渡して、後はひたすら「なるほど。へぇ、なるほど…ですね」と、バカっぽいけど、当たり障りのない返答を繰り返す、それだけしてればいいの。それくらいできるでしょ、ゆとり世代にだって。

マイ　そうかぁ、今の新人って「ゆとり教育」世代なんだ・・・早いね。

ハル　何「おばさん」じみたこと言ってるの？主婦だからって、老けこむなよ。若さに媚びるな。重ねた時間に胸を張れ、マイ。

マイ　別に媚びてなんてないよ。

ミワ　ハル、ありがと。

ハル　ん？ミワがお礼を言うことじゃないんじゃない？私も「４人組み」の一人なんだしさ。

ミワ　そうだね。

ハル　それにしても、見事に空っぽな部屋ね。これじゃ、失踪って言うより、引越ね。どっちにしろ衝動的な行動じゃないってことは確かね。（窓を見て）これか・・・。

ミワ　ハル、何か知ってるの？

ハル　ミワもマイも慌てて、この部屋まで上がってきたでしょ？

２人　…。

ハル　そりゃ、慌てるよね。あんなメールがくればさ。トラブルメーカーって言ったって、こんなこと初めて。２人が慌てるのはわかる。だから、見落とすのもわかる。わかるよ。

ミワ　何を見落とした？

ハル　…。

マイ　ハル。

ハル　コレ。

と、封筒を出す。

ハル　下の郵便受けに入ってた。見なかったでしょ、二人とも。こう言うときは郵便受けを確認しないと。いつまでいて、いつからいないかの確認ができるよ。少なくとも、おおよその範囲は絞られる。実際は郵便物はなかったから、郵便局に最後の配達がいつか確認しないと、何もわからないけどね。

マイ　それは？

ハル　美咲から私たち3人への手紙。

2人　美咲から！

ハル　美咲にはわかってたんだね。あのメールを送れば、私たちがここへ来ること。少なくとも、誰か一人は来る。で、これを見つける。より確実な部屋の中におかなかった理由は…わからん。でも、見つけることは出来た。期待に応えることができたわけだ、私たち。

ミワ　読んだの？

ハル　うん。

ミワ　なんて？

と、手紙よ読む。

ハル　「ミワ、マイ、そしてハルへ。

誰が最初にこれを見つけるのかな？きっと見つけるには3人だって信じて書いてる。

私のメール届いたよね。そう私は「向こうの世界」へ行ってきます。もう、こっちの世界は嫌になっちゃたんだ。

理由？なんだろ？よくわからない。だって、嫌になるのに、明確な理由がほしい？それがないと嫌にならないのかな？私は、そうじゃないと思う。みんな、嫌になってから理由を探すんだよ。自分と他人を納得させるために。

今の私は、そんな納得いらないんだ。3人には悪いけど、今は探さない。きっと、向こうで落ち着いたら振り返るよ。「なんでこっちに来たかったのか？」って、ちゃんと考える。

だから、ミワ、怒らないで。マイ、心配しないで。ハル、呆れないで。私には今、希望が見えてるんだよ。

3人とも「向こうって何処だよ」って思ってるよね。私にもよくはわからないけど、これだけは教えておく、「向こう」は「窓の向こう」もう一つの私の人生がそこにはあるんだ。

それじゃ、3人とも元気でね。　美咲」

と、読み終えると、手紙をミワに渡すハル。

ハル　意味わかんないでしょ？

マイ　やっぱり。

ハル　「やっぱり」？

マイ　ミワがそうじゃないかって。その窓、可笑しいでしょ？何かあるなって。

ハル　前にはなかったよね、これ？

ミワ　多分。

マイ　そう思う。

ハル　窓ってさぁ、どうして付ける？

マイ　はぁ？

ハル　壁に穴開けて窓をどうして作るの？

マイ　それは…光を取る…ないと昼間でも暗いよね。それに、空気。換気できないとこまるよね。

ハル　後は？

マイ　後…は？

ミワ　景色を見るため。

ハル　そう。窓の向こうには景色が見える。この窓は、何を見せてくれる？

マイ　壁。

ハル　（溜息）

ミワ　「もう一つの私の人生」

マイ　この窓は「もう一つの私の人生」を見せてくれる窓ってこと？

ハル　手紙をそのまま理解すれば。さらに、向こうに行けたんだから、その窓を境にして、こっちとあっちがつながってるってことになる。今は単なる壁だけどね。

マイ　やっぱり、この向こうへ行ったんだね。「洋服着て、時計持ったウサギ」はいたんだね。

ハル　あぁ。いるか？そんなウサギ？マイ、見たことあるの？

マイ　ないよ。でも、見ていないだけで、いないって確証はない…でしょ？

ハル　それ、ミワが言ったことでしょ？

マイ　分かる？

ハル　宇宙人の存在を信じるのと同じ理屈ね。「いないという証明が出来ない以上、いるという可能性はある」…肝心なのはさぁ、ありえる、ありえないじゃなくて、目の前のそれが「本物かどうか」…。パラレルワールドが存在しているとして、そこへつながる入口が存在しているとして、そこへ案内してくれる「洋服着て、時計持ったウサギ」がいるとして、さて、この窓は本物の入り口？もちろん「違う」とは言い切れないし「そう」とも言い切れない。目の前で事が起これば「本物」ってなるけど、起こらないからと言って「偽物」って証明にはならない。なるのは「事が起こらなかった」という証明と「限りなく偽物」って推測。結局は…どっちを信じられるか？だろうね。２人は？

マイ　ミワは最初から、その窓からって信じてる。私はそれ聞いて「あり得ない」って思ったけど…。

ハル　今は、「そうかも」って思ってる？

マイ　うん。

ハル　じゃぁ、私は「信じない」方に。

マイ　何それ？

ハル　３人共に同意見じゃ、つまらないでしょ。展開が行き詰る。こう言うのは賛否あって、話が進むの。

ミワ　お好きな「ディベート」？

ハル　そうね。

ミワ　遊びじゃないのよ。

ハル　「ディベート」は遊びじゃないよ。確かに、遊びとしてやっても面白いけど。私は真剣よ。美咲は大切な友達。遊び道具になんてしない。２人と同じだよ。どんなにあいつがトラブルメーカーだったとしても、そのネタを肴にお酒を飲むなんてこと…私たちはしない。いつだって、正面から向き合ってきた。だから、美咲も３人にメッセージを残した。今度も正面から向き合ってくれると信じてね。だから、向き合わないと。

私たちがたどり着かないといけないのは、この窓が「入口」かどうかじゃない。「美咲がどこにいるか？」そして、本当にそこがあいつの求めた場所なのかどうか？少し大げさに表現すれば…美咲が幸せかどうか？それだよ。

ミワ　分かってるよ、そんなこと。

ハル　これが「本物」なら、美咲は窓の向こうでもう一つの人生へ。そして「偽物」なら、こんな凝った「嘘」をついてまで消えたかった「何か」を抱えている。どっちにしろ、こうなるまで私たちは何もできなかった。

ミワ　分かってるよ、そんなこと。

マイ　だから、探す。美咲を探し出して「なんでだよ」って直接、聞く。

ミワ　決まってるでしょ、そんなこと。

ハル　それじゃ「本物」だと思っている２人に。パラレルワールドに行った美咲から何でメールが届くの？

マイ　あっ、そうソレ。ソレ、不思議なんだよね。

ミワ　マイ！

ハル　「ディベート」ってのは「意見対立を明確にして話し合う」の。自分の立場を危うくする発言はしない。

マイ　完全にハルのテリトリーだよ、コレ。

ミワ　…「ディベート」は「意見相違の解消」を第三者にゆだねるものでしょ？違う？

ハル　違わない。

ミワ　だよね。

ハル　そういうことか。適任かも。

ミワ　だよね。

マイ　何？何、２人で決めちゃってるの？

ミワ　「ディベート」はね・・・。

マイ　それはわかった。バカにしてる？

ハル　ようは、私とミワがそれぞれの立場で意見をぶつけ合うんで、どっちの意見が説得力あるか、それをマイがジャッジするってこと。

マイ　私が決めるの？

２人　そう。

マイ　なんで？

２人　適任だから。

ハル　イエスかノーかの立場だけで、意見するの出来ないでしょ？

ミワ　でも、人の意見を柔軟に受け入れることができる。

２人　適任じゃない。

マイ　それって「人の意見に流されやすい」ってこと？そう言ってる？

２人　違うよ。

マイ　違うの？

２人　違う。

マイ　本当に？

２人　（深くうなずく）

マイ　了解。さぁ、始めて。

ハル　なんで、メールが届く？

マイ　そう、なんでパラレルワールドに行った美咲から、こっちの世界の携帯にメールを送ることができるんですか！はい、ミワ、答えて！

ミワ　…ちょっと、待って！違うよね、コレ。

マイ　はい？違うの？

ミワ　そういう司会的なのはいらないのよ。

マイ　そうなの？

ハル　聞いていてくれればいいから。単純に私たち２人の話を聞いて「あぁ、こっちの言う方が筋通っているな」とか「納得できるな」とか、そういうことだから。しゃべりは、いらないから。

と、指を口に当て「黙れ」のポーズを見せるハル。

それをまねるマイ。

「どうぞ」とミワを促すハル。

ミワ　パラレルワールド…別世界だからと言って全てが「異なる」とは限らない。社会の成り立ち、イデオロギー、価値観、テクノロジー全てが「別物」とは限らない。それならば…携帯メールのシステムに互換性があるという可能性は否定できない。そして、限定されているとはいえ、二つの世界がつながっている場所がある以上、人も空気も電波も行き来できる。メールが届いても、不思議はない。

何かを発しそうになり、慌てて口を押さえるマイ。そして、大きくうなづく。

ミワ　次は、私から。美咲は、確かにこの４人の中ではトラブルメーカー的な役割。特に男関係はね。いろいろアリバイ工作にも手を焼いた。

マイ　ホントよね。あっ。

慌てて手を口に当て「黙る」のポーズを見せるマイ。

ミワ　でもリアリストだよ。ファンタジーな思考回路を持っているわけじゃない。その美咲が、わざわざこんな「嘘」を付くとは思えない。付く理由がない。いつだってあいつは真っすぐ泣きついて来た。だから、正面から受け止めて来た。

ハル　確かに美咲はリアリストだね。手紙を読む前に「窓の向こう」を信じたミワの方がよっぽど「ファンタジーな思考回路」を持っている。そう、あいつはリアリスト。だから、何かに打ちのめされ、逃げたくなった。打ちのめされ、追いつめられたから、いつもとは違う自分が出てきた。あいつは消えた。それは事実。今までには一度もなかったこと。いつもと違う「変化球」を投げる美咲であっても不思議はない。むしろ、違うことをするからこそ、リアルだと思うよ。

大きくうなづくマイ。

ハル　この窓…窓自体に力があるの？窓には「ＹＫＫ」って書いてある。

急いで窓を確かめるマイ。

ハル　ってことは、普通の窓だよね。だとすると、力は後から誰かが与えた。呪文で？その方法はなんでもいいんだけど、それは美咲がやったの？そ

んな力、いつ手に入れたの？それともやっぱり「洋服を着て、時計を持ったウサギ」が？

マイ　あった！書いてあるよ「ＹＫＫ」！

ミワ　マイ。

頭を下げ、手を口に当て「黙る」のポーズを見せるマイ。

ハル　「ＹＫＫ」の刻印はダミー？

ミワ　それはきっと「ＹＫＫ」の本物のアルミサッシ。だって、開閉時の滑りが違う。滑らか。

何が言いたそうなマイだが・・・。

ミワ　力は常に人が持っている。そういうもの。

ハル　それじゃ、美咲が？

ミワ　美咲が欲したことで、力がやってきた。人生は選択の連続。「ＡかＢか」「右か左か」いつだって選択しなきゃいけない。そして、選んだ方が必ずしも「最良」とは限らない。少なくとも、「違うのでは」と疑う。そう思った時、人はきっと「あの時選ばなかった人生」に憧れる。「もう一つの」「別の」…「本当の」自分。想いはエネルギー。恋をすれば、深夜に車を飛ばして恋人に会いに行く。大勝負だと思えば、幾日も徹夜しても企画書を書き上げる。「もう一つの人生を」と強く欲した美咲に…。

と、そこへメールの着信。ミワに。

マイ　美咲からかも。

急いで携帯を確認するミワ。

マイ　美咲から？

ミワ　…。

マイ　ねぇ。

と、今度はマイの携帯にメール。

マイ　私？

と、携帯を見る。

マイ　…。

ハル　２人とも、美咲からなの？どうなの？

と、今度はハルの携帯にメール。携帯を見るハル。

ミワ　３人とも、美咲から…だよね。

２人　（うなずく）

ミワ　今度は、それぞれに違うメールが送られてきた…？

マイ　うん。絶対に違うメール。

２人　（うなずく）

ミワ　多分、３人とも「なりたかった自分」がメールに書いてあったんじゃないかな。違う？

マイ　昔、思ってた「なりたかった自分」になってるんだって。

ミワ　自分でも忘れていた…「なりたかった自分」。

マイ　でも、美咲に話したことなんてない。

ミワ　私も、ない。

ハル　言い切れる？

２人　…。

ハル　私も、言ったことはないと思うんだ。

マイ　なんで？

ハル　３人とも、なんでも話しているようで、話していないことはあるもんだね。意図してか、たまたまかは別としてさ。友達、親友っていっても知らないっことはやっぱりあるんだね。言っていないことはあるんだね。

ミワ　忘れてたよ、この夢。

マイ　私なんて、幼稚園の頃の話だよ。

ハル　どうする？この際だから、言ってみる？

マイ　恥ずかしいよ。

ハル　それはお互い様、じゃない？

ミワ　２人の知りたい。

ハル　そうなんだよね。自分の言うの恥ずかしいってことより、２人の知りたいんだよね。じゃ、決まりね。

マイ　待ってよぉ。私、別に…２人なんて…。

ハル　知りたくない？

マイ　知りたい。でも…。

ハル　もう言うよ。マイ、聞いたら、言うんだよ。

マイ　えぇ。

ハル　「ハル。こっちのあなたに会ったよ。ＰＲ会社の女社長だって。私はよくわからないけど「恋の駆け引きより１００倍楽しい、情報の駆け引き。」なんだってさ。

と、携帯を閉じる。

ミワ　「ミワ。こっちのあなたに会ったよ。女優さんやってた。主戦場は舞台なんだって。だから『そんな有名人じゃないよ』って、謙遜してたよ。」

と、携帯を閉じる。

マイ　（少ししぶるが）「マイ。こっちのあなたに会ったよ。カズ君の奥さんになってた。女の子２人のお母さん。可愛かったよ、子供たち。マイにそっくり。」

と、携帯を閉じる。

ハル　マイ。「カズ君」って誰？

マイ　えぇ！？なんで？２人の時は、突っ込みナシだったでしょ？スルーだったでしょ？

ミワ　で、誰？「カズ君」

マイ　…。

ハル　３０にして、そんなことで照れるなよ。

マイ　（ハルをにらむ）

ハル　で、誰？

マイ　…初恋の人。

２人　おぉ。「初恋」ぃ。

ハル　同じ年？

マイ　２つ上。

ハル　優しい近所のお兄さん。ってとこ？

マイ　ぶー。どっちかっていうと、いつも私がイジメてたって感じ。だって、男のくせに泣き虫だし、根性無し。ミミズ触れないんだよ、男のくせに。

ミワ　マイは触れたの？

マイ　昔わね、平気だった。男の子みたいだった。いつもカズ君と遊んで、泣かせて…楽しかった。自分で泣かせて置いて、最後は「泣かないの」って慰めるの。そうするとね「マイちゃん、ありがと」って…それが聞きたくて、きっと泣かせてたんだね。

２人　ふーん。

マイ　なによ。そんな感じでしょ、初恋なんて。

ハル　で、幼いマイちゃんは、泣き虫カズ君のお嫁さんになりたかったわけだ。

マイ　うん。

ミワ　可愛い話じゃん。なにが恥ずかしいのよ。こっちが恥ずかしくなる話だよ。

マイ　ミワの女優って…ミワ、女優になりたかったの？

ミワ　ねぇ、お腹空かない？そう言えば、昼、食べてない。食べようと思ったら、美咲からメール来たから…食べてない。

マイ　ちょっと。

ハル　私も。私の場合は、日常茶飯事なんだけどね。お昼に昼ごはんは、なかなかないね。

マイ　ちょっと。何？同盟？ズル。

ハル　マイは？

マイ　何？

ハル　お腹すかない？
マイ　…ちょっと。
ハル　よし。買ってくるか。腹が減っては…だ。何がいい？
ミワ　いっしょに行くよ。
マイ　私も。
ハル　誰か残ろうよ、万が一だけど、美咲が帰ってくるかもしれないし。
ミワ　マイ。お願い。
マイ　私が留守番？
ミワ　何買ってくればいい？
マイ　カスタードプリン。ホイップの乗ってるの。
ミワ　好きだねぇ、そういう「ザ・スイーツ」な感じなの。
マイ　悪い？
ミワ　別に。ただ少し気にしなさいよ。だんだん落ちにくくなるんだから。（と、脇腹をつまむ）お互いに。
ハル　（笑って）気をつけなさいね。
ミワ　あんたもよ。「アタシ、太らない体質なの」って油断してるやつが危ないのよ。ってか、太っちゃえ！
ハル　はい、はい。じゃぁ、行ってくるね、マイ。
マイ　帰ってきたら、ミワの女優の話だからね。
ミワ　はい、はい。わかったよ、カズ君のお嫁さん。

と、消えてゆく2人。

一人になったマイ。手持無沙汰に、携帯を開けたり閉じたりし始める。

そして、例のメールを開く。

マイ　「カズ君のお嫁さんになってた」か…。

と、携帯を閉じる。が、そう時がたたないうちに、また開く。

そして。独り語り始める。

マイ　美咲。何の冗談よ。どこで知ったのよ「カズ君」…酔って私言っちゃた？な事、ないよね。ハルもミワも知らなかったし…。なんで、美咲が知ってるのよ。

ねぇ、美咲、本当に、向こうにいるの？向こうがあるの？

カズ君…今は３２かぁ。流石にミミズやムカデで泣かないよね。何してるのかなぁ。派遣切りにあってハローワーク通いだったらショックだな。結婚、しているのかな。

～間～

なに考えてるんだろ、私。仮に今逢ったところで、どうにかなるわけないないでしょ。っていうか、逢うわけないじゃない。どこにいるかわからないし、仮にすれ違ったって、お互い気付かないよ。ねぇ。

ねぇ、美咲。初恋なんて、そんなもんでしょ？

子供の頃の話。「お嫁さん」って言ったって、結婚が何かもわかってないんだから。ただの口癖みたいなもんよ。「私、カズ君のお嫁さんになる」ってね。別にそうなるために努力したわけでもなし…何もしなかったんだよ。私、結局何もしなかったんだよ。思い出だけ抱きしめて、踏み出せなかった。ずっと好きだったのに。大きくなって「恋」とかそういうの知ってからも、好きだったのに…。

ねぇ、美咲。向こうの私は、踏み出したんだね。あの日、諦めなかったんだね。偉いね、私。向こうの私はさ、偉いね。

あそこで踏み出さなかったから、今があるんだけどね。美咲たちとも出会ってなかったかもしれないしね。今の旦那とも。わかってるよ、それも、わかってる。

ねぇ、美咲。あんたなにを求めてそっちに行ったのよ。

と、メールが届く。

慌てて確認するマイ。旦那から。

マイ　「今日も遅くなる」ね。早く帰る時だけ、連絡くれればいいですよ。

（と、返信を打ち始める）「今、ハルたちと…美咲の部屋に来ています。私も、遅くなるかもしれません。」送信っと。

マイ　向こうじゃ「お母さん」なんだね、私。

と、再びメール。

マイ　珍しい、返信？

と、確認すると美咲からだった。

マイ　美咲。「こっちに来ない？あと一度だけ、入口が開く。一度だけ。そして、一回に通れるのは一人だけだよ。こっちに来ない？」

と、携帯を閉じるが、すぐさま開いて。

マイ　「いつ開くの？どうやって開くの？2人にも同じメールを？」

と、返信する。

少しして、ファストフードの袋を抱えたハルが帰ってくる。

ハル　ただいま。

マイ　お帰り？

2人　あれ？ミワは？えっ？

ハル　私があんたのプリンを買いに行くから、先に戻りなって言ったのに。何してんだろ。はい。プリン。

マイ　ありがと。

ハルの袋をじっと見るマイ。

マイ　ハル。

ハル　何？

マイ　ファストフード？

ハル　昼は大抵ね。

マイ　ちゃんとしたの食べないと。

ハル　あら、これ、ちゃんとしてない？敵に回しちゃうよ、マック。

と、食べ始める。

マイ　そういうことじゃないでしょ。

ハル　主婦っぽいね、そういうの。

マイ　バカにしてる。

ハル　してないって。自分は結婚願望ないけど、結婚する女子をバカにはしてないよ。ある意味、尊敬してる。

マイ　「尊敬」？ハルが私を？

ハル　「マイ限定」じゃないけどね。私、わからないんだよね「結婚」って一体何か？ずっと言葉だけは聞いているけど、さっぱりわからない。他にないよ、こんなにも耳馴染みがある言葉なのに、さっぱり正体がわからないものって。多分さぁ「カズ君のお嫁さんになりたい」って言ってた頃のマイは「結婚」って何かなんてわからないで「お嫁さん」って言ってたでしょ？でも、きっと漠然と「楽しいもの」「幸せな事」っていうのは感覚的にわかってたんだと思うんだよね。だから、「なりたい」って思ったんだろうし、きっと笑顔だったはず、その時のあんたは。私にはそういうものないの。ホントにわかんない。「結婚」って何？

マイ　私もわかんないよ。

ハル　嘘。あるって、結婚してるんだから、マイなりの「結婚」ってあるでしょ？そういうの。私、職場でさ「結婚したくない女」ってなってるんだけど、「したくない」っていう積極的っていうか主体的な感じはないんだよね。「結婚が何よ。紙切れ一枚で、人生を捨てるなんて出来ない」とかいう感じの…少し上の世代には多かったけど…そういうのは、ない。ないんだよね。

マイ　で、何を尊敬してるの？

ハル　だからさ、私に「わからないもの」を「わかってる」ってこと。

マイ　わかってないって。

ハル　わかってるって。「楽しい」とか「思ったほどじゃない」とか「実はつまらない」とか。

マイ　それは、すればわかることだよ。してないハルにはわからなくて当たり前だよ。

ハル　する前はどうだった？「結婚」って何だと思ってた？

マイ　…。いるの？考えてる人？

ポテトを立て続けに口に運ぶハル。

マイ　いるの！？

と、そこへミワがファストフードの袋を持って帰ってくる。

ミワ　ただいま。

マイ　ミワ、聞いて！ハルが…ハルが結婚を考えてる人がいるんだって！

ミワ　うそ！？

マイ　ホント。ね、ハル。

ハル　向こうが勝手に言ってるだけ。

２人　いるんだぁ。

ハル　別に私はそんな気ないよ。

２人　ふ～ん。

ハル　何よ？

マイ　始めはいつもそんな感じ。「私、興味ありません」って。

ミワ　ハルは基本的に「ツンデレ」だからね。

マイ　そうそう。

ハル　違います。

２人　ふ～ん。

ハル　何よ？もういい。それより、ミワどこ行ってたの？

ミワ　…ちょっと。

ハル　何「ちょっと」って。

ミワ　ちょっとは「ちょっと」

ハル　そういうところ変わらないね。

ミワ　何が？

ハル　人の相談受けるタイプの人間って、自分の相談、人にしないんだよね。

ミワ　相談事なんて、ないですよ。食べよ。

と、袋を開け食べ始める。

マイ　さっき、体型の話しして…2人ともファストフード？

2人　好きなんだもん。

マイ　私のプリンだって同じだけど。

と、プリンを開けるマイ。

マイ　（一口食べて）おいしい。幸せ。

ハル　流石、コンビニ。幸せも売ってるんだね。

マイ　そう言えばさぁ、いつから「ファーストフード」じゃなくて、「ファストフード」になったか知ってる？

ハル　いつから？

マイ　知らないよ。気が付いたら「ファストフード」だよ。こういううんちく的なのは2人のテリトリーでしょ。

ハル　だって。知ってる？

ミワ　さぁ。

マイ　怪しい…。でもさぁ「ファースト」って伸ばしたくなるよね。その方がなじんでる。

ハル　パソコンで…ワードでさぁ、「ファーストフード」って伸ばして打つと、波線出るよ。

マイ　ん？

ハル　ワードの「文章校正」機能。「ら抜け」とか「い抜け」言葉で打つと、右側に緑の波線でるでしょ？あれが出るの。

マイ　えぇ！あれ、そういう意味だったの？うっとうしんだよね、あれ。

ハル　そこか…。

マイ　あの波線、出ないようにできないの？

ハル　…できるよ。

マイ　教えて！

ハル　「Ｏｆｆｉｃｅボタン」ｖ「ｗｏｒｄオプション」と行って、「オプション画面」の「文書校正」メニューを…。

マイ　ストップ。

ハル　ん？

マイ　覚えられない。また今度、パソコンあるところで、教えて。

ハル　（マイをにらむ）

マイ　ゴメン。

ミワ　元々「ファースト」じゃなくて「ファスト」が正しいのよ。

マイ　へっ？

ミワ　だから「ｆｉｒｓｔ」じゃなくて「ｆａｓｔ」なの。

マイ　だから？

ミワ　いい？（袋を手にし）コレは出てくるのが「早い」食べ物であって、「一番の」食べ物じゃないの、わかる？

ハル　私にとっては、「ｆｉｒｓｔ」でもあるけどね。

マイ　ええ？

ミワ　ハル。

ハル　失礼！

マイ　ちゃんと説明して！

とメールが。

３人の動きが止まる。

ミワ　美咲、からだね。

マイ　だね。

ハル　見ますか。

と、３人メールを確認する。で、互いを見合う。

マイ　やっぱり３人に…。

ミワ　美咲は「誰か一人」を自分で選んだりはしないでしょ。

ハル　できないよ。

～間～

ハル　「あと１０分」後だって、どうする？

マイ　「どうする？」って、ハルは行きたいの？恋人出来たのに？

ハル　（マイに）旦那、どうするの？

マイ　ミワは？ミワはどうするの？

ミワ　お願い。譲ってくれないかな。

２人　！

ミワ　ハルは仕事出来る自立した女で、その上恋人もできたんでしょ？幸せじゃない。マイは旦那さんいるし「三食昼寝付き」ってわけにはいかないだろうけど、幸せでしょ？私を向こうに行かせてよ。

マイ　嫌だ。

ミワ　マイ、お願い。

マイ　…。

ミワ　マイ？

マイ　そんな簡単に譲らない。今度は、簡単には引かない。

ミワ　マイ…。

ハル　勝手に「あんた達は幸せでしょ」って決めつけないでほしいね。

ミワ　ハル。

ハル　ミワは向こうでは女優してるって書いてあったんだよね。なりたいの今でも？メール来た時、自分がなんて言ったか覚えてる？「自分でも忘れていた…そんな昔に思っていた」って言ったのよ。忘れてたこと、その程度のことだったんでしょ？きっと、努力なんてしなかった。違う？たまたま見た舞台か映画か…「あぁ、いいな」って簡単に憧れて「なれたいいな」って簡単に思って「でも、私には無理よね」って簡単に忘れた…その程度の事で「譲って」なんて、嫌だね、私。

ミワ　ハルなら、まだこっちにいたって叶えられるじゃない。起業できるじゃない。ハルなら、出来るよ。

ハル　正面からぶつかったことないくせに「出来るよ」なんて、簡単に言ってほしくないね。

マイ　私はミワの気持ち、わかるよ。「何もできなかった」そんな自分が悔しいから、もう一度チャンスがあるならって…わかるよ。ハル。努力をしないで叶えようって思ってるわけじゃないんだよ。そんなズルイこと思ってるわけない。向こう行って「あの時、踏み出せた自分」を見たいの。私と何が違ったのかを知りたい。そして…しっかり、自分に向き合わないとって思ってる。

ハル　また2対1？今日はそういう日ね。敵が多い。

2人　…。

ハル　私は行きたいわけじゃないよ。譲りたくないだけ。

マイ　同じじゃない。

ハル　同じじゃない！全然違うよ、マイ。2人ともわかってる？「開くのはあと一回」なんだよ。行ったら最後、帰っては来れない…って事。パラレルワールドをちょっと覗いて、不思議体験して帰ってる…ってわけじゃない…らしい。それでも行く？あの時「告白出来なった」のに、「自分と運だけが頼りの世界に飛び込めなかった」のに、今ならって…本気？

2人　…。

ハル　私はね、ずっと…。「安く使える」「使い捨て出来る」って思われている若い女。そう軽く見られて、採用されて。軽く使われて…企画書書いたって面倒くさい顔されるだけで…でも書いてきた。そこから先に進むために戦ってきたのよ。全然進みもしないのに、いつも走ってきた。信じてた。止まらなければ、きっと手が届くって…バカみたいに信じてた。疲れるよぉ。すっごく疲れる。どれだけ走って、どれだけもがいても、いつも同じ景色。調子いいだけのバカ、コネだけのバカ、流行り言葉でカッコつけるだけのバカ…そんなバカばかりがどんどん先に進んでいく。「もう止まろうよ」っていうんだよ、時々、もう一人の私がさ。「使い捨て出来る若い女の賞味期限は切れたんだよ」って言うんだよ。「結局、乗っかってるレールがハナから違う。仕事のスキルだけじゃ、結局は届かない。」そう諦めたっていいかなって。だれも責めたりしないよねって、

そう思うんだよ。時々。でもさ、向こうの私が「届いた」っていうなら
どこかでそのレールに乗った？…ハナから乗ってたの？全く違うルート
を探り当てたのかもしれないよね。それなら、こっちの私にも「まだや
れること」あるじゃないかなって、思うよね。思いたい。

マイ　…。

ミワ　譲らない理由にはなってない。

ハル　「目の前の世界」でもがけないなら、どこへ行っても同じだよ。向こう
に行ったところで、ミワはミワ。マイはマイ。「あの時、踏み出せなかっ
た」今も悔やむ３０女のまま。何も変わらない。

～間～

（噴き出して）美咲のメールが本物ならの話でしょ？私は信じてないよ

（窓を開いて）この向こうに「私がいる」なんて話。私は一人いれば十
分よ。

～間～

（と、窓を閉じる）どうする？マイ、旦那残して、行くの？「初恋は叶
わないから美しい」ってもんでしょ？恋が何で、男と女が何で、結婚何
でって知ってしまってからの「今更の初恋」しても、凹むよ、きっと。

マイ　…帰ってこれないんだ。

ハル　そこ！？

マイ　「帰ってこれない」って意識すると、「行きたくない」って反射的に浮か
んだ。頭の中に、「誰が弁当作るの？」「誰が洗濯するの？」「誰が“お帰
り”って言ってあげるの？」って…そればっかり浮かんじゃった。

ハル　それはきっと、大学出たばっかの若い部下がやってくれるよ。

マイ　（ハルをにらむ）

ハル　そんなにモテないか、あんたの旦那。

マイ　（ハルをにらむ）いい。私、行かない。誰かが向こうに行ったら、美咲
が帰ってこれない。そういうことでしょ？「あと一回」って。

ハル　（少し考えて）だね。

マイ　４人で遊べなくなるなら、いいや。カズ君が「あのまま」カッコいいと

は限らないし。

ハル　「カッコいい」？泣き虫カズでしょ？

マイ　（ハルをにらむ）だから、ミワも、ね。

ミワ　本当に、なりたかったんだって。

マイ　ミワ？

ミワ　なりたかった。なりかったのよ。

と、ハルに迫る。

マイ　わかってるよ、わかってるって。

と、それを抑えようとするマイ。

ミワ　わかってない！ハルは何もわかってない！「踏み出したくても、踏み出せない」「許されない」…そういうことだって、あるんだから。走りたくたってスタートラインに立つことが許されないって…あるんだからね。忘れるしかない。そういうことってあるんだからね。ハルはカッコいいよ、すごいよ、戦ってきたよ。だからって何よ！だからって何よ…。それば かりが偉いんじゃないんだよ！私だって、この世界でもがきたいよ、苦しみたいよ、走りたいよ。

と、マイに抱えられるようにして、ハルから離れる。

マイ　ミワ、大丈夫。ハルだってわかってる。そうだよね、ハル。

ハル　わかんないよ。

マイ　ハル！

ハル　よくできた大人じゃないし…わかんないよ。わかっちゃたら、「イエスマンを貫いてるアイツ」「腹くくってコネをフル活用してるアイツ」「誰よりも専門誌読んで言葉仕入てるアイツ」…アイツらのこと「バカ」って言えなくなっちゃう。だから、わかんないって、そんな簡単に「わかったよ」って言って…いわない、絶対。

マイ　…。

ミワ　ありがと、ハル。

〜間〜

マイ　あっ。

２人　は？

マイ　時間！

ミワ　…開けば「本当」でも、開かなかったら…。

ハル　美咲が「嘘言った」って証明にはなるんじゃない。後どれくらい？

マイ、携帯を見て…。

マイ　あっ。

２人　！

マイ　もう…過ぎてる。

ハル　（自分でも携帯を見て）１分か…誤差かもね。

ミワ　意外と一番期待してるの、ハルなんじゃないの？

ハル　本当だったら、面白いと思うよ。半年は営業先で「つかみネタ」にこまらない。それに、開けば届くかもしれない。

ミワ　ん？

ハル　「何してんの！帰ってこい！」って。

ミワ　そうね、言えたね。

ハル　どこへ行ったんだか。どこへ行ったって、結局あんたが変わらなきゃ、同じ景色だよ。

ミワ　でも、窓の向こうの景色って、楽しそうに見えるよね。

ハル　雑音が聞こえないからね。都合のいいように受け取るからね。

ミワ　そう思って見ても、楽しそうに見えるよね。

ハル　それは否定しない。

〜間〜

マイ　言おうよ。

２人　はぁ？

ハル　何を？
マイ　美咲に。ココから叫ぼう。
２人　はぁ？
マイ　（窓を指差して）美咲に「帰ってこい」って。
ハル　窓に、向かって？
マイ　美咲とは、つながってるよ、きっと。
ハル　メールの方がつがってると思うけどね。
マイ　（ハルをにらむ）
ミワ　どうする、ハル？
ハル　隣の人、驚くね。
マイ　いないことを、祈ろう。
ミワ　いてもいいよ。美咲が悪いんだから。
マイ　じゃぁ決まりね。

と、窓を開けるマイ。

マイ　いくよ。
ミワ　うん。
ハル　いいよ。
マイ　せーの。

３人が、窓に向って…美咲に向って…自分自身へ、叫ぶ。

その声は「この世界の騒音」にかき消されて、聞こえない。それでも３人は叫んでいる。叫び続けている。

やがて、静寂が訪れる。

マイ　届いたかな？
ハル　どうだろ？
ミワ　届いたよ。

マイ　帰ってくるかな？

ハル　どうだろ？

ミワ　帰ってくるよ。「帰らない家出が一番カッコ悪い」んだから。

マイ　これ、「家出」？

ミワ　家出。

ハル　若いねぇ、美咲。

ミワ　私たち、十分若いよ。

ハル　どうだろ？

マイ　帰ってこなかったら、また3人で叫ぼう。ねっ。

ハル　若いねぇ。

ミワ　今の自分に不満があるんだから。私たち、十分若いのよ。

再び「この世界の騒音」が響く。

ミワ、窓を閉じる。

力強い静寂が3人を包む。

FIN

無断転用・複製禁止